# 人食いガフと明るいミライ

神崎　優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人食いガフと明るいミライ

【Ｎコード】

Ｎ９２６８Ｇ

【作者名】

神崎　優太

【あらすじ】

一匹の怪物と一人の少女が村はずれに越してきました。二人は仲良く静かに暮らしています。しかし、悪い噂が村に流れます。「怪物が娘をさらって村はずれにすみついたぞ……」

その日、一匹の怪物と少女が村はずれの森に越してきました。
「今日からここが私達のお家ね」
少女、ミライがそう言うと、いかめしい顔つきの怪物は「ガフガフ」と答えます。
「ガフ、お水を飲みすぎてはだめよ」
ミライがそう続けると、ガフは「ガフガフ」と照れたように笑います。
ガフは一日に大量の水を飲みます。そのせいで、いつも川や湖が干上がってしまうのです。
「少しづつ、大切に飲むの。そうすれば誰も怒らないわ」
ミライは楽しそうに歌いはじめました。その歌声はまるで小鳥のさえずりのよう。
ガフは歌声にうっとりと聞きほれています。
彼は、その姿からみんなに怖がられ友達ができませんでした。いつもいじめられて泣いていたのです。
でも、ミライだけは別でした。
ガフは少女を抱きかかえて肩に乗せ、大きな手でいとおしそうに頭やほほをなでます。
ミライはガフの大きな手が好きでした。ガサガサのまるで紙やすりのような手でほほをなでられると、少女のほほは赤くはれ上がります。それでも少女はその醜い怪物の弱くて優しい心が大好きでした。
その様子を物陰から見ていた一人の男に、二人はまったく気づいていません。
「あのすばらしい歌声を、なんとか手に入れられないものか……」
「怪物が少女をさらって、村はずれに住み着いたぞ！」

「子供が大好物だって！」
「水不足もその怪物のせいじゃないのか？」
数日後、村ではそんな噂が広まりだしていました。
子供を持つ親達は心配で仕方ありません。又、長い間、雨が降らず、水不足も深刻な状態でした。
「怪物を退治しよう！　娘を助け、水を守るんだ！」
村長は、大げさな身振り手振りで怪物退治を宣言します。
村人達は、歓声を上げて手に武器をとり、村はずれに向かいました。
そして、ガフとミライがいつものように楽しく歌をうたっていると、村人達が現れ、こう言ったのです。
「村から出て行け怪物！　さもなければ、痛い目をみるぞ！」
ガフとミライは、手をとりあって逃げ出します。
「娘を放せ！」
しかし、村人はそういって、ミライをガフから引き離します。
ガフに向けて、雨のように石がふりそそぎました。
ミライは声をふりしぼって叫びます。
「違う！　違うの！　ガフは悪くない！　ガフは何もしてない！」
村人達は、ミライの言葉にまったく耳を貸そうとしません。
「出て行け怪物！」
「醜い人食い巨人！」
ガフは一人で逃げ出すしかありませんでした。
「……これであの歌声は私のものだ」村長は、そう一人、ほくそ笑むのでした。

「私達は何も悪いことをしてないのに、なぜいつもこうなるの？」
ミライは、毎晩、窓辺で悲しみにくれていました。
彼女は村長に養子として迎えられ、毎日、毎日、無理矢理に歌をうたわされています。
もちろん、あの夜からガフには会っていません。

しかし、その夜は違いました。
「ガフガフ……ガフガフ……」
それは小さくかすかな声でしたが、ガフに違いありませんでした。
ガフは夜更けにそっと村へ忍び込み、ミライに会いにきたのです。
「ガフ、無事でよかった……」
その夜から、毎晩、ガフはミライに会いに訪れるようになりました。
しかし、ある晩、ついに村長に見つかってしまいます。
「おまえのような恐ろしい怪物を、歌姫に近づけさせはしないよ」
村長はそう言って、ガフを村から追い出しました。
ついに、二人はまったく会うことができなくなってしまいました。

ガフは決心します。
魔法使いに頼み、美しい体と声を手に入れることにしたのです。
「おまえの目を見た人間は、おまえが人間に見える。美しい声と白い肌をもった人間に……」
魔法使いは不気味に笑いながら、こう続けます。
「ひきかえに……おまえの大事な物をもらうよ。ヒヒヒ……」
ガフはもう一度、ミライに会いに行きました。
村人達は、ガフを見ても少しも怖がりません。
「どこかの貴族かしら……」
「お城の王子様かもしれないわ……」
特に若い娘たちは、ガフの姿に見ほれています。
ガフは上機嫌で、ミライの家を訪ねました。
「あなたはガフじゃないわ。ガフガフ言ってないし、手はすべすべよ」
困ったことに、ミライはガフに全く気がつきません。
どんなに説明しても、ガフガフ言ってみても、彼女は聞く耳を持ちませんでした。
ガフは、あきらめて立ち去ります。

そして、大事な物を失った悲しみに泣き続けました。来る日も来る日も泣き続けました。流した涙が川をつくり、湖となっても彼の涙は枯れません。

その涙は、村の水不足を救いました。

村人達はガフに感謝します。

しかし、強欲な村長とその仲間が、またしても悪知恵を働かせます。

「もっと泣いてもらうにはどうしたらいいだろう？」

「いや、もっといい手があるぞ……」

なんてことでしょうか。村長は水欲しさにガフの目をうばい、またしても彼を村から追放したのです。

目を無くした結果、ガフの魔法もとけてしまいました。

魔法がとけたミライはガフの本当の姿に気づきます。

「何故、私は気づいてあげられなかったの……」

ミライは悲しみのあまり、泣き続け、あの歌声をなくしてしまいます。

「歌えないなら、用はない！　出ていけ！！」

そして、彼女も村を追いだされました。

二人がくらしたあの森でガフは力尽き、倒れました。

もう立ち上がる気力もありません。何もかも失ってしまったのです。

しかし、その時、ガフの耳に聞こえてきたのはあの歌声でした。

前ほどの美しさはなく、すこししゃがれていましたが、ガフにはすぐわかりました。

彼は、立ち上がりました。

森の中を手探りで進みます。木の枝がほほをさき、石につまづいて転びました。

その音に気づいた少女がかけ寄ります。

それは、まさしくミライでした。

「ガフ！　私の大事なガフ！　ごめんなさい……気づいてあげられなくて、ごめんなさい……」
ミライは泣き出します。何度も何度もあやまりながら、泣き続けます。
ガフは、できるだけ優しくミライのほほをなで、涙をふきました。
それでもミライのほほは、赤くはれ上がります。
「ああ、このガサガサの手。間違いない、ガフだわ……」
二人は手に手を取り合って森の奥へと消えていきました。

それ以来、誰も二人の姿を見たものはいません。
二人は死んだのだと、村人達はいいます。
でも、何年かに一度、村にこんな噂が流れるのです。
森の奥深くでまるで小鳥のさえずりのような美しい歌声を聴いた――そこには、巨大な足跡が残っていた――。

## （後書き）

少々、難産でしたが、なんとか形になりました。楽しんでもらえればうれしいです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9268g/

---

人食いガフと明るいミライ

2010年10月12日13時31分発行